

倉本一平
長谷川周三
の
歴史レポート

本能寺の変 その4

長谷川 周三(瑞浪高校 1970 年卒)

2021 年 6 月



前回は、正親町天皇（おおぎまちてんのう）が、近衛前久（このえさきひさ）を呼び「どこぞに、信長を討てる者はいないか」と懇願されたところまでお話ししました。さて、正親町天皇から信長殺しを頼まれた近衛前久は、その後どのようにして信長を討つことが出来たのでしょうか。

近衛前久と信長

そもそも、前久は、信長が足利義昭を上洛させて征夷大將軍に就任させた時に、信長と朝廷とのパイプ役として活躍したことで、信長からは絶大な信頼を得ていました。

それ故に、信長は前久が要求する朝廷への献金は望みどおり拠出してくれましたし、信長が得意としていた鷹狩や乗馬には度々同行して、腕前を競う仲でもありました。

信長が誠仁親王のために築城した二条城の隣には、前久の大邸宅がありますが、それを献上したのも信長でした。

また、前久は、足利義昭が征夷大將軍になったころ、当時義昭と敵対していた三好三人衆と気脈を通じているとの理由で関白職を取り上げられ、京から追放されました。

これは、義昭と公家の二条晴良が共謀して行ったことでしたが、前久は 7 年もの長きにわたり厳しい流浪生活を過ごすことになりました。

その後、信長と義昭が不仲になり義昭が京を追われた際に、信長が朝廷に奏上して前久を帰京させ、朝廷に復帰させました。

前久にとっての信長は、恩人であり信頼しあう友でもあったわけです。

そんな関係を十分知りながら、正親町天皇は敢えて前久に信長殺しを命じたわけです。

前久自身、信長が天皇や朝廷をないがしろにすることには憤りを感じることはありませんでしたが、そうかと言って信長を殺す気にはどうしてもなりませんでした。

信長を殺せる人物は誰か

そんな複雑な気持ちの中で、信長の殺害の可能性について考えます。

天性9年（1581年）の暮れごろには、信長に正面から戦いを挑んで勝てる敵将は既にいなくなっていました。

殺害できる可能性があるとするれば、信長の身内か家臣が信長の警護が手薄になった時に、襲撃するほかありません。

では、身内でそれが出来る者は誰でしょうか。

信長を殺すだけの気力や度胸を持ち合わせていたものは、信長の嫡男信忠以外には考えられませんでした。

信忠は19歳で信長から織田家の家督を譲り受け、信貴山城や上月城の戦いに総大将として参戦し、光秀、秀吉らの諸将を指揮して勇猛果敢な戦いを挑む武将に成長していました。

信長は信忠に大きな期待を寄せ、後継者として織田家が更なる発展を遂げるよう、政治信条や理念、ビジョンなどを事細かく伝授していました。

それ故に、仮に信忠が信長を殺して天下を取る気になったとしても、信忠がそのまま後継者となれば、世の中の変化は望めません。

そうすると次は家臣です。

信長を殺害して自らが天下人になろうと考えるだけの胆力、知力も持ち合わせた家臣となると、秀吉、家康、光秀のほかには見当たりません。

では秀吉ならどうでしょうか。

秀吉は現在中国毛利攻めの最前線備中高松城（岡山市）にいて戦闘中であり、呼び戻して信長を討つことは困難です。しかも秀吉の信長に対する忠義心は人一倍強く、信長もそれを感じていて、双方絶大なる信頼関係で結ばれています。たとえ前久が正親町天皇からの勅命だから殺してくれと頼んでも、おいそれと引き受けてはくれないだろうと、前久は考えました。

次は家康です。

家康は、天正9年3月に長年の懸案だった武田方の居城、遠江の高天神城を落城させました。しかし、その後も武田勝頼の勢力は健在で、遠江と武田領駿河の国境付近の防衛には手を抜くことは出来ず、神経を休める暇もないほどでした。

そうした状況下で家康が安土や京に出向いて信長を討つことは非常に難しく、益してや家康の慎重で用心深い性格を考えれば、信長殺しを頼むことは無理と言わざるを得ません。

残るのは光秀です。光秀は、この時期には近江の国、丹波の国、合わせて34万石、およそ2万人の兵力を持つ武将になっており、朝廷との重要なパイプ役を務めながら、信長の軍事参謀として織田軍団を牽引する重要なポストに就いていました。

信長からは絶大な信頼を得ており、光秀も信長のどんな困難な言い付けも、自身の考えを述べた後は、素直に聞き入れ対処していました。

光秀と信長の関係は良好で、柴田勝家や秀吉などは北陸や中国地方など遠方の戦場に派遣されていましたが、光秀だけは常に畿内に置かれ信長から重用されていました。

前久には、この先、光秀と信長の関係が修復出来なくなるほど悪化するとは、到底考えられませんでした。

かくなる上は、前久自身が信長を鷹狩にでも誘いだし、隙を見て襲い掛かるしか方法はないのかと考えましたが、信長の訓練された武術の前に、手傷さえ負わせることも出来ないのではないかと、悔やむ毎日でした。

甲州征伐

そして、年が明けて天正10年2月1日、苗木城主遠山友忠から信長のもとに「武田方の木曾義昌が、当方の調落により織田側に寝返った」との報告が入ります。

信長は、武田勝頼を討つ好機と考え、寝返った木曾義昌の弟を人質に出させて、遠山友忠と共に木曾口の鳥居峠から諏訪に侵攻させました。

そして、2月3日には飛騨からは金森長近、関東からは北条氏政、駿河からは徳川家康を出陣させ、2月12日には嫡男信忠を総大将として、森長可（もりながよし）、団忠直、滝川一益、河尻秀隆、毛利長秀ら屈強な陣立てで伊那に攻め入りました。

あらゆる方面から織田軍が侵攻を始めると、多くの武田家臣は恐れをなし、織田や徳川方に内通したり、離反したりしました。中でも勝頼の従弟で武田家の重鎮、江尻（静岡市清水区）城主穴山梅雪が徳川方に寝返えると、一気に武田方の統制が崩れ、勝頼を守備する武将も段々と少なくなってしまいました。

そんな情勢の中で徹底抗戦したのは、勝頼の異母弟の高遠城主の仁科盛信でした。

3月2日、織田信忠軍5万の兵に総攻撃を仕掛けられた盛信は、信忠の降伏勧告にも耳を貸さず、3千の守備兵で勇敢にも激しい戦闘に耐え、織田方の織田信家（信長の従弟）などを討ち取るなどの攻防を繰り返して織田方を苦しめましたが、所詮は多勢に無勢、奮戦むなしく力尽きて自害しました。

信長甲州へ出陣

この知らせを聞いた信長は勝利を確信して、いよいよ甲州に向けて挙兵します。

甲州征伐の布陣は、丹羽長秀、明智光秀、筒井順慶、細川忠興、高山右近らの軍勢5万と、正親町天皇からの勅命を受けての戦ということで、太政大臣の近衛前久、日野輝資、勧修寺晴豊ら50名ほどの公家が同行するというものでした。

前久にとっては、信長と光秀の人間関係や信長の日頃の動向を観察出来る、またとない機会を得ることになったわけです。

3月5日、信長は輿に乗って、まるで物見遊山のごとく出で立ちで安土を出発しました。

織田軍から追われる身となった勝頼は、居城の新府城（韮崎市）を捨て武田家家老小山田信繁の居城岩殿城を目指して逃走しました。

しかし、織田方の滝川一益の追手が近づくと、頼りにしていた小山田までもが離反し、ついには天目山（甲州市）に追いやられました。

この時すでに勝頼に寄り添ってきた家臣は40名程になっており、この先逃げ延びる可能性は無いと考えた勝頼は、嫡男信勝をはじめ秋山紀伊守、長坂長閑、小原下総守らを伴って自刃しました。

3月11日の巳の刻（午前11時頃）、清和源氏新羅三郎義光以来続いてきた名門甲斐武田氏は滅亡しました。

これで、信長の領土は、今でいえば長野県、山梨県、群馬県、静岡県の駿河地方に拡大されることになりました。

3月19日、信長一行はようやく上諏訪に到着、諏訪大社の隣の法華寺を本陣として論功行賞の授与と、戦勝祝賀会を行いました。

ここでの出来事が、この先の信長の運命を大きく変える転換期となります。

信長が光秀を折檻

法華寺に陣を構えた信長のもとには、総大将の信忠や織田信澄、徳川家康、滝川一益ら譜代の武将のほか、木曾義昌、穴山梅雪、小笠原信嶺ら寝返り組が次々と挨拶に参上、信長は終始にこやかに対応して刀や黄金など惜しみなく進呈し、退出する時には縁まで見送るといった鄭重振りでありましたが、祝宴が始まると信長の態度は一変します。

この祝勝会には、総大将の織田信忠、織田信澄、徳川家康、丹羽長秀、明智光秀ら家臣と穴山梅雪、木曾義昌ら寝返り組、近衛前久ら公家衆およそ百余名が参加していました。

祝宴を前にして信長は神妙な面持ちで「この度は総大将信忠の決死の働きで、思いのほか速やかに武田を滅ぼすことが出来た。諸侯には、この先信忠の元、織田家の発展に身を尽くして励んでくれ」と言って盃を挙げると、それを受けて居並ぶ武将たちは「殿（信長）おめでとうございます」と威勢よく勝利の歓声をあげました。

祝宴は無礼講とあって、酒が進むにつれ歌や太鼓に合わせて舞や踊りが興じられ、程よく酔いが回ったところで信長は、各々部将に今回の戦の武勇伝を聞かせろと命じました。

勝頼を自刃にまで追い込んだ滝川一益や高遠城を落城させた河尻秀隆らは、自らの武勇を愉快地に冗談交じりで披露し信長を満足させていますが、光秀にその順番が回ってくると思わぬ異変が起こります。

光秀は、信長の挨拶で、この戦いで苦勞した武将達への勞いの言葉が無かったことを気にしていましたので、何のためらいもなく「今日のような目出度い日を迎えられるのは、信長様を始め、各々の方々の日頃からのご苦勞があったればこそ、天下平定ももうすぐそこに見えてきましたぞ」と気持ちの思うままに挨拶しました。

すると信長が急に立ち上がり、顔色を変えて盃を床に叩き付けると、光秀の前に勢いよくずかずかと歩み出て、帯に差していた扇を抜いて光秀の額目掛けて何度も何度も打擲（ちようちやく）し始めました。

この場に居合わせたもの皆が呆気にといられ、固唾を飲んで信長の行動を注目していると、信長は「光秀、今何と申した！今回の甲州征伐で汝は何の働きをしたのか、何もしてないではないか、知れたような口をきくな！」と信長特有の甲高い声で叱り飛ばしました。

場の雰囲気は一変して、皆に緊張が走りました。

光秀は織田軍団にとっては無くてはならない存在。信長からも絶対なる信頼を得ているナンバーワンの織田家臣です。

その光秀が咎められたわけですので、ほかの武将たちの肝が震え上がったのも当然です。

その張り詰めた雰囲気はしばらく続き、光秀は信長に襟がみ掴まれ、回廊の欄干に頭を打ち付けられていました。



法華寺



恵林寺

その痛々しい状況を見かねて、場内の雰囲気を変えてくれたのは家康でした。

家康は、スーッと静かに信忠の膳の前に進み、そして大声で「信忠様、おめでとうございます。大勝利はお見事な采配のお陰、今後のご指導お願い奉ります」と叫びました。

信長は家康の思いもよらぬ大声に圧倒されたのか、光秀に向けた暴力の手を緩めました。

その後信長は、一旦は席に戻りましたが、皆の興醒めした雰囲気を感じて退席しました。

光秀の元に寄り添ったのは前久です。

前久は、光秀の額から滴り落ちる鮮血を、絹の手拭いで押さえてやりながら「上諏訪までの道行きで、信長様が光秀様を咎めるような出来事がございましたか」と尋ねると、光秀は「特段変わったことはございません。ただ、殿はは、下伊那の阿智村で勝頼の首実検されたころから急に口数が少なくなり、蘭丸に家臣共を近づけると申され、三度の食事も一人でされていたようでした」と、まだ震えが収まらない体で応えました。

前久には信長の行動が余りに極端すぎて、理解出来ませんでした。

あれだけの信頼関係を築いていた光秀を、大勢の武将がいる前で一喝し、しかも恥をかかせたということには、それ相応の理由があったに違いないと思いました。

そしてその答えは、信長の帰路の出来事で少しずつ判明してきました。

4月2日、信長は上諏訪法華寺の本陣を後にして4月3日には甲府に到着し、武田信玄が居城としていた「躑躅（つつじ）が崎館」の焼け跡に仮御殿を建て、陣を取りました。

恵林寺焼き討ち

そこで信長は、甲府塩山（甲州市）の恵林寺に、反織田同盟の一人で京から逃走した六角承禎の息子、佐々木次郎が匿われているという情報を聞きつけ、寺側に引き渡しを要求しました。

しかし、その寺の住職、快川紹喜（かいせんじょうき）は「寺は聖域であるので、俗事とはかかわりない」と言って引き渡しを拒否しました。

信長は烈火のごとく怒り、信忠に「もう我慢ならん。火をかけて坊主共々焼き尽くせ！」と申し伝えました。

その話を近くで聞いていた前久と光秀は、驚きのあまり気色を変えて信長に言上します。

「信長様、快川僧正は正親町天皇のご友人であり、また近頃、天皇より大通智勝国師という国師号を賜ったお方、どうかお命だけはお助け下され」と前久は太政大臣という朝廷の地位にありながら、信長に平伏して懇願しました。

そして光秀も地面に頭を擦りつけて「殿、快川僧正は美濃のご出身で、光秀とは姻戚にございます。幼少から多くの教えを賜った恩人でもありますゆえ、どうかお命ばかりはお助け下され」と体を震えながら訴えました。

しかし信長は、悪霊にでも取り付かれたかの面持ちで「何を申すか、前久、光秀！この信長に逆らう者はたとえ恩人であろうと天子であろうと、家臣であろうと、皆殺しにするのが儂（わし）の流儀じゃ。忘れるな！」と言い捨てて、その場を去ってしまいました。

前久と光秀は共に、信長の言った「皆殺し」という言葉に、今だかつて感じなかった狂気と恐怖を感じました。

その後、前久と光秀は馬に跨り、一路恵林寺を目指しました。

寺に到着すると、山門の楼上には100人を超す僧侶が快川僧正を守っている様子が窺え、すでに山門の下には信忠の兵によって山ほど積まれた枯れ草に火が放たれていました。

燃えさかる炎の中で、快川僧正は光秀の姿を見つけると「安禅（あんぜん）必ずしも山水を須（もち）いず。心頭滅却すれば 火も自（おの）ずから 涼（すず）し。光秀よ！世は戦国、平和な国を造れよ！」と叫び、猛火の暑さに昏絶（こんぜつ）する老若僧侶を励ましつつも、朱色の椅子に座り悠然としたまま炎に包まれて行きました。

前久と光秀の信長への忠誠心が、憎しみに変わったのはこの瞬間からでした。

今回は「本能寺の変」が起きる前の信長や近衛前久、明智光秀の動向や心理状態を書かせていただきましたが、次回は、光秀が悩みに悩み抜いて信長殺害に踏み切っていくお話しをさせて頂きたいと思っていますので、ご期待ください。